

疎開先探しのはなし

小島鋼平 昭和名古屋市在住 昭和7年生

『中部日本新聞』（現『中日新聞』）の昭和19（1944）年6月29日に、「できるだけ田舎へ 強制でない学童疎開」という見出しの記事があり、また、翌30日付けには「学童疎開取りやめ 市教育局が学校長会で言明」とあります。このことから、市の教育局は学童疎開はないものとし、学童の疎開を林間学校の夏季講習程度に軽く考えていたことがうかがえます。これを知った軍幹部は激怒、翌7月1日の新聞に、「急げ 学童疎開」、また続いて2日には「寺子屋で結構」と子どもの市からの追いだしを強要しました。



この軍部の通告に市もあわてて疎開先のリストを作り、そして、学校長も自分の学校の疎開希望数にあう市町村を尋ねて交渉する大変な業務をさせられることとなります。学童疎開は国家事業であるから引き受けるのが当然というような態度に出たため、町や村の担当者ともめたこともあるようです。ともかくこうして名古屋の学童疎開は8月5日から20日までの短期間に121校、7万6千余人が161か所に集団疎開することになりました。いろいろ問題はありましたが、その中には次のようなことがあったのではないかと思うことがあります。

最初、名古屋城下町に住む裕福な親たちは、子どもの疎開先が並の場所では承知できなかったようでしたが、最後に修学旅行の聖地である伊勢神宮のある宇治山田の旅館となったので承諾しました。推測ですが、これで名古屋の集団疎開が一挙に進んだのではないかというのが私の意見です。

ということで、「めでたし、めでたし」といいたいところですが、ひと月もたない9月1日の新聞に、「旅館から寺院へ 山田の疎開先変更」とあり、その理由が「食料の調達が難しいからだ」となっています。

しかし、食料の調達が難しいのはどこも同じであったはず。とすると疎开学童が追いだされたのは伊勢神宮が皇室や軍の高官、官僚など、高級幹部が戦勝祈願する神域であること、にもかかわらず宿泊する場所が小学生に占拠されているということにあったのではないのでしょうか。この例は三重県湯の山温泉でもあり、四日市の軍需工場の管理者や軍の傷痍軍人の保養所とされることにより、疎开学童が真冬の最中ふもとの寺院に移動させられることからわかります。

こんな話、本当ならわびしいですね。

(2015年 記)

豊田市 洞泉寺に疎開した松栄小学校（昭和区）

疎開時期が遅いのは

備考 力石町如意寺には昭和19年8月5日学童疎開の児童が来ている。

松栄小学校は昭和19年8月の疎開時に疎開の実施を免れていたこと（人家疎ナル地域校だった）と、翌昭和20年4月の二十年度新規疎開時においても、戦争末期で混乱していたこともあり資料が少ないのではないかと。学校は3月名古屋大空襲で全焼した。

右の図 名古屋市内の学童疎開地域割

- A 第一次密集地帯校
- B 第二次密集地帯校
- C 重要施設附近校
- D 人家過疎ナル地帯校

松栄はDの字の下

(名古屋学童疎開を記録する会 小島鋼平さんより)

